

熊本市域における「どんどや」の現状と今日的意義

市川 薫

熊本市都市政策研究所 研究員

キーワード：どんど焼き、年中行事、コミュニティ形成、自然との関わり

1. 緒言

1.1 研究の背景

経済成長がひと段落した近年、人々の生活に経済的豊かさだけでなく精神的な豊かさが求められている。地域づくりにおいても、人とのつながりや、自然や歴史文化の理解がより重要になる中、祭りなどの行事が、地域の人々や組織間の交流・連携を生むなど、地域コミュニティの形成に寄与する可能性が注目されるようになってきている（木田ら，2011；小西，2014；大平ら，2014；塚・山本，2010）。本稿は、こうした背景のもと、熊本市域で広く行われている年中行事の一つである「どんどや」に着目して、その実態を把握するとともに意義を考察するものである。

1.2 関連知見の現在

どんどやは、一般的には「どんど焼き」の名称で知られる小正月の火祭り行事である。民俗学によれば、1月14日あるいは15日に行われることが多く、北海道や東北地方北部を除く全国で広くみられる。地域により「左義長」、「どんど」、「さいと焼き」、「セーノカミ」など様々な名称があり（齊藤，2012）、熊本では「どんどや」と呼ばれる。本稿では、熊本を含め特定の地域に関する記述ではそれぞれの地域における名称を用い、総称としては「どんど焼き」を用いる。どんど焼きは、内容も地域により様々であるが、氏子や地域の人々が集い、木や竹を組んで薪、藁などを積み上げて作った櫓を、正月飾りとともに燃やすものが多く、かつては子どもが中心となって準備が行われてきた。この火にあたったり、餅を焼いて食べると一年中病気にかからないとか、書初めを火にくべて高く舞い上がると習字が上達するなどと言われる。また、正月に迎えた神を煙にのせて送る行事とも考えられている（齊藤，2012）。

しかし、高度経済成長期以降の農林漁業の衰退や都市への人口流出による地域社会の構造変化などにより、ど

んど焼きを含む伝統的な年中行事は、その多くが衰退したり、変容してきた（石井，2020；谷口，2017）。笠井（2019）は、滋賀県栗東市内で自治会により行われている「左義長」について、神事性や伝統といった意味がはもはや喪失していることを指摘している。そして今後の継続にとっては、子どもたちが地域と接し社会化の機会を得たり共有経験を形成するといった効果に着目することが重要と述べている。一方都市部では、どんど焼きが従来の意味や内容の変化を伴いつつも、現在も盛んに行われていることが指摘されている（田中，2012；石井，2020）。東京都多摩市域では、「セーノカミ」、「セートヤキ」と呼ばれていた行事が一時は衰退したものの、昭和50年代のニュータウン開発の頃、「ふるさと作り」を目的に、教育委員会関連機関である青少年問題協議会の地区委員会が「どんど焼き」の呼称で復活させた。2002（平成14）年には市内全17地区のうち13地区においてどんど焼きが行われている（松尾，2003）。また、仙台市内では「どんと祭」が昭和30年代以降、正月送りの神事から、観光資源、企業や町内会の親睦や交流の場へと性格を強めていった。特に昭和50年代以降は、それまでの社寺での開催に加え、郊外の団地や公園において町内会が運営するものもみられるようになった（安藤，2006）。同市内には様々な規模のどんと祭が存在し、参拝者数が数万人単位の観光化した少数のどんと祭と、数百人あるいは数十人といった中小規模の多数のどんと祭とに、二極化している可能性が指摘されている（高橋，2010）。

現在のどんど焼きについては、こうした一部の研究以外では、実態調査や地域づくりの視点からの考察は限られている。熊本市域に目を向けても、都市化や地域コミュニティのあり方が変化する中で、現在も多くのどんどやが開催されているものの、その実態の調査分析はなされていない。

1.3 本稿の目的と構成

本研究では、熊本市域における現在のどんとや¹の開催実態を明らかにし、その上で、どんとやの今日的意義について考察を加える。

本稿の構成を図1に示す。まず、近年のどんと焼きの性質が変化しているという既往研究の指摘を踏まえ、過去（昭和40年代以前）の市域のどんとやについて、文献によりその特徴を整理した（2章）。次に、現在のどんとやの開催日及び開催場所のデータを分析し、全市的な開催状況を把握した（3章）。そして、どんとやの実施や櫓に関する詳細について、8か所のどんとやについて聞き取りと観察調査を行った（4章）。これらの結果から、どんとやの時代的变化や今日的意義を考察し（5章）、研究の成果と課題を示した（6章）。

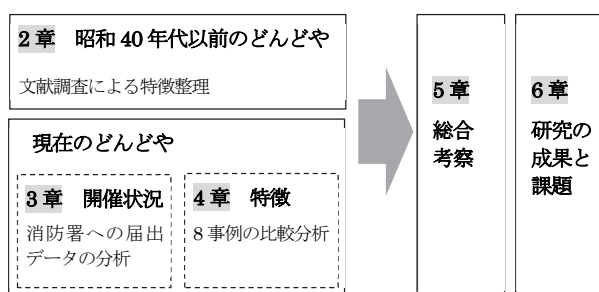


図1 本稿の構成

2. 文献による昭和40年代以前のどんとやの特徴整理

2.1 どんとやに関する文献の収集

過去の熊本市域のどんとやの特徴を整理するために、熊本市や合併町村の自治体史と、「熊本市内の年中行事調査報告」（熊本市教育委員会，1983）を参照した。各文献の発行年及び、編纂の経緯や記述方針等に関する記載から、これらにおけるどんとやに関する記述は昭和40年代以前のものと判断した²。

自治体史には、地域の民俗に関する項目の中で、どんとや等の年中行事についても記載されていることが多い。本章で用いた自治体史（表1）では、各自治体内の特定の地域事例が記述されている場合や、地域を特定せず一般的な記述がされている場合がある。

「熊本市内の年中行事調査報告」は、昭和50年代の熊本市教育委員会による民俗調査結果をまとめたものであり、「熊本市内祭り・郷土芸能調査報告」（熊本市民俗調査委員会，1981）に続いて刊行された。調査は年長者を対象とした聞き取りによるもので、昭和55年から56年

表1 本研究で用いた自治体史

自治体史名	発行年	備考
熊本市史	1932年	復刻版（1973年発行）を参照
新熊本市史 （別編第二巻・民俗・文化財）	1996年	記述の基準は概ね戦前（昭和前期）におかれている（p.192）。当時の熊本市域を対象とした一般的な記述に加え、次の地域の事例が記述。上高橋町、松尾町近津、沖新町、旧春日村、西里地区、本山河原、寺原田畑、花岡山、龍田町弓削、奥古閑町。
河内町史 （柑橘・民俗編）	1987年	昭和47年に編纂事業が発足。芳野地区横山及び野出、河内地区白浜及び塩屋に関して記述。
植木町史	1981年	昭和48年に編纂委員会が発足し調査開始。
北部町史	1979年	昭和47年に編纂委員会が発足し翌年から調査開始。
村誌富合の里	1971年	
肥後川尻町史	1925年	復刻版（1980年発行）を参照
天明村史	1961年	

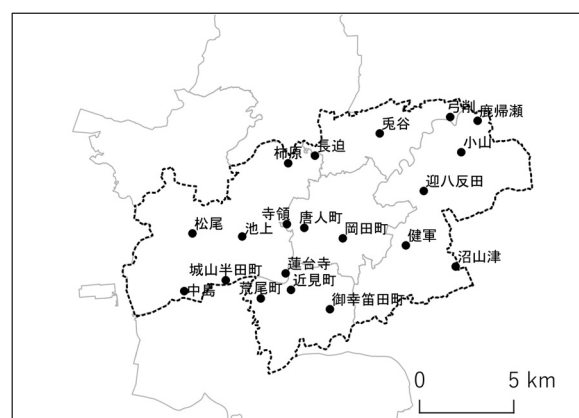


図2 「熊本市内の年中行事調査報告」の調査地

報告書の付図をもとに作成。灰色線は現在の市・区境を、黒点線は調査当時の市境をそれぞれ示す。

にかけて、当時の市内20か所（図2）で実施された。報告書には調査地毎に年中行事の日付と内容が記されており、記述の細かさは様々であるが、全ての調査地でどんとやに関する記載がある。

このように、文献や地域によって記載方法や情報量は異なるが、以下では、これらの資料から昭和40年代以前の市域のどんとやの特徴を整理した。なお文中の括弧内に、2.2では自治体史名及び事例地についての記述の場合は事例地名を、2.3では調査地名を付記した。

2.2 各自治体史にみられる記載

参照した全ての自治体史に共通して、どんどやは1月14日に行われていたことが記されている。時刻は夜もあれば昼や早朝もあった。開催場所についての記載は多くないが、河原（熊本市史）、寺の境内跡（新熊本市史・旧春日村）、村はずれの広場（河内町史・芳野地区横山）などが挙げられていた。どんどやを行う地域単位についても明確な記載が少ないが、旧河内町河内地区白浜では、藩政期のムラの範囲よりも小さな単位である「区」で行われていたという。

どんどやは、子どもが中心となって行われたとする記述が多くみられた。例えば熊本市では、子どもたちが手分けをして数日前から竹を山から伐り出したり、各家から藁束などを集めた（新熊本市史）。植木町では、前日に子ども組が中心となり、藁、麦カラ、竹などを集めて櫓を組み立てた（植木町史）。芯木の伐採は大人が行った事例（河内町史・河内地区白浜）もあるが、行事全体が大人が中心となっていたと記されていたのは1事例のみだった（河内町史・河内地区塩屋）。多くの地域で、櫓には竹や藁、作物ガラを用いており、一部地域では芯木には松を用いていた（河内町史、新熊本市史・熊本市松尾町近津）。材料は山から竹を伐り出したり、各家から集められたが、芯木については長男の誕生した家が準備するところ（新熊本市史・松尾町近津及び奥古閑町）もあった。

書初めの紙を燃やし高く上がると字が上達する、火にあたったり餅を焼いて食べると健康に過ごせるなどの言い伝えは多くの地域でみられた。

2.3 「熊本市内の年中行事調査報告」での記載

「熊本市内の年中行事調査報告」の20調査地中19か所においてどんどやの開催日は14日であり、1か所のみ15日だった。時間帯は朝も夕もあった（図3）。開催場所が記載されていた調査地は多くなかったが、お宮境内（兎谷）、白川河畔（城山半田町）、水田（中島）などの記載があった。開催の単位については、小山や柿原、池上で「組」を単位として実施されていた³。

櫓は竹で組んだものが多く、例えば、城山半田町では、大きな竹で芯木を立て、周りに小竹を束ねて中に藁を詰めたものを立てかけ、縄で巻き付けて円錐形にした。そして地区の人がそれぞれ正月飾りを持ち寄ってまわりに積み上げた。健軍でも竹で櫓を組み、中には正月飾り、

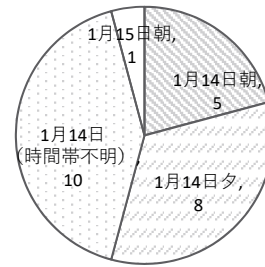


図3 「熊本市内の年中行事調査報告」の調査地におけるどんどやの開催日・時間帯

下段の数字は調査地数を示す。報告書の記述をもとに集計して作成。

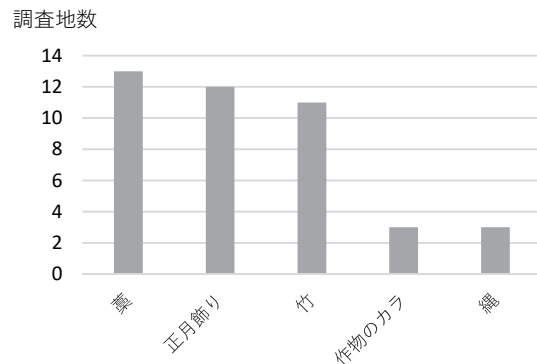


図4 「熊本市内の年中行事調査報告」に記載のあるどんどやの櫓の材料

材料について記載のあった17か所について集計して作成。「竹」には「モウソウチク」、「小竹」と記載されていたものを含む。

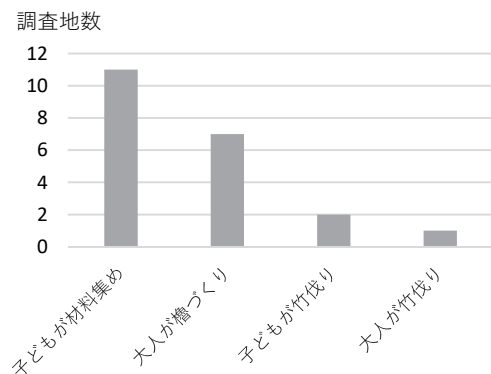


図5 「熊本市内の年中行事調査報告」の調査地におけるどんどや準備の子ども・大人の役割

準備の役割について記載のあった11か所について集計して作成。

豆がら、麦わらなどを詰めて、外側をからいもカズラで巻きたたてた。一方、少数だが櫓を組んでいないものもあり、例えば荒尾町では藁をうず高く積み火をつけたものだった。記載のあった櫓の材料の種類と調査地数を図4に示す。藁や竹、正月飾りが多いほか、松、ブナ科の樹木⁴、作物のカラなどの使用も見られる。松尾町では中

心には松を枝 5 段をつけて伐ったものを用いていた。櫓の芯木となる竹や松は山から伐り出すほか、長男の生まれた家が提供するものとされているところもあった（蓮台寺、松尾）。

どんどやの準備は、藁やしめ縄などの材料集めについては子どもが行うことが多い一方で、作業の大変な櫓組みは大人が行ったり手伝っていたという記載が比較的多くみられた（図 5）。池上では、13 日夕方に家の前に各戸が出した藁を子ども組がどんどやの場所に運び、14 日は大人たちが櫓を組んだ。また健軍でも、子どもたちが中心となって家々から材料を集め、櫓の組み立ては大人が手伝った。長迫や寺領では、材料が他の地域から盗まれないように、子どもたちが夜に泊まり込んで番をしていた。

竹の先を割って餅を挟んで焼くなど、餅焼きに関する記述も多い。こうして焼いた餅を食べたりどんどやの火にあたると風邪をひかない、書初めが炎の勢いで高く舞い上がると字がうまくなるなどの言い伝えも多くみられた。また、燃え残りの竹や木などを持ち帰って家の門口などにさして魔除けにしたり（兎谷など）、燃え残った竹でヤトバシと呼ばれる箸を作り各家に配った地域（寺領）もあった。

2.4 小括

以上より、市域のかつてのどんどやの主な特徴として、以下のことがいえる。どんどやは、1 月 14 日に現在の市域で広く行われ、農地、社寺の境内、河原等の開けた場所で実施されていた。また、材料集めなど子どもの参加が特徴的な行事であった。櫓はほとんどの地域では竹で組み、中に藁などを入れた後、縄で全体を巻き、正月飾りとともに燃やしていた。一部では芯木に松を使った。また、火にあたったり餅を焼いて食べると健康に過ごせるとか、書初めを燃やし高く上がると字が上達する等の言い伝えがあった。

3. 熊本市域における現在のどんどやの開催状況

3.1 分析の手順と方法

市域の 2020 年のどんどやの開催状況について、主催者等が消防署に提出する届出書のデータ⁵を用いて、開催日、開催地の分布、開催場所の立地について情報を整理し特徴を分析した。

開催地は、届出書に記載された住所を GIS 上にプロットした。さらに、地番・戸番までの正確な場所が把握できたものについては、地図や空中写真を用いて土地利用や施設等の立地の種類を特定した⁶。

3.2 どんどやの開催状況

3.2.1 開催日

消防署へ届出のあったどんどやは全部で 175 か所あった。そのうち、1 月 11 日（土）－13 日（月・祝）の開催が 8 割以上を占めており、翌週末の 18 日（土）－19 日（日）とあわせて、土休日の開催が 9 割近くを占めた（表 2）。2 章でみたように昭和 40 年代以前にはほとんどのどんどやが 1 月 14 日に開催されていたが、2020 年には 2 か所のみだった。

表 2 どんどやの開催日別の開催地数

開催日		開催地数	%
		153	87.4
土休日	1/11(土)－13(月・祝)	141	80.6
	1/18(土)－19(日)	12	6.9
平日	1/10(金)、14(火)－17(金)	21	12.0
その他*		1	0.6
計		175	100.0

※平日と土曜日にまたがる連続の 3 日間が記載されていた。雨天時等の日程の変更の可能性をふまえた記載と考えられる。

3.2.2 開催地の分布

表 3 に行政区及び各校区毎のどんどや開催地数を示す。また、図 6 に開催地数別の校区数とその割合を示す。市内全 92 校区中で開催地が 1 か所以上あったのは、70 校区（76%）だった。最も多いのは開催地数が 1 か所の校区であり 40 あった一方で、5 か所以上の校区も 9 つあり、中でも突出して多かったのは富合校区の 25 か所、芳野校区の 14 か所だった。

人口分布とともに開催地の分布を見ていくと（図 7）、全体的には、中央区やその周辺の人口の集中する地域に多くみられる傾向があるものの、前述の富合校区や芳野校区など、南区や西区の人口の少ない地域にも開催地数が集中して分布しているところが見られた。

3.2.3 開催場所

開催場所の立地の種類が特定できたのは全開催地数の半分弱にあたる 83 か所だった⁷。特定できた中で、最も多かった立地は小中学校で 23 か所だった（図 8）。

表 3 行政区及び校区毎のどんどや開催地数

行政区	校区	開催地数	行政区	校区	開催地数
中央区 計 15 箇所	壺川	2	西区	小島	4
	碩台	0		中島	2
	白川	0		芳野	14
	城東	1		河内	0
	慶徳	1	南区 計 63 箇所	日吉	0
	一新	2		川尻	3
	五福	1		力合	1
	向山	1		御幸	2
	黒髪	1		田迎	1
	大江	1		城南	1
	本荘	1		田迎南	1
	春竹	0		飽田東	5
	出水	0		飽田南	2
	砂取	1		飽田西	3
	託麻原	1		中緑	2
	帯山	0		銭塘	2
東区 計 24 箇所	白山	0		奥古閑	0
	帯山西	1		川口	0
	出水南	1		日吉東	0
	画図	1		富合	25
	健軍	1		杉上	5
	秋津	4		隈庄	4
	泉ヶ丘	1		豊田	5
	若葉	0		田迎西	1
	尾ノ上	1		力合西	0
	西原	1	北区 計 40 箇所	清水	3
	託麻東	7		龍田	2
	託麻西	1		城北	1
	託麻北	0		高平台	1
	桜木	1		楠	1
	東町	0		麻生田	1
	月出	0		武蔵	3
	健軍東	0		弓削	1
	託麻南	2		楡木	1
	山ノ内	2		川上	7
	長嶺	1		西里	7
	桜木東	1		北部東	3
西区 計 33 箇所	古町	1		植木	1
	春日	0		山本	3
	城西	5		田原	1
	花園	2		菱形	1
	池田	3		桜井	0
	白坪	1		山東	1
	高橋	0		吉松	0
	池上	1		田底	1
	城山	0		龍田西	1

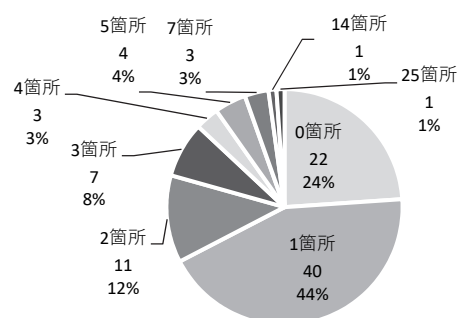


図 6 どんどや開催地数別の校区数（中段）と割合（下段）

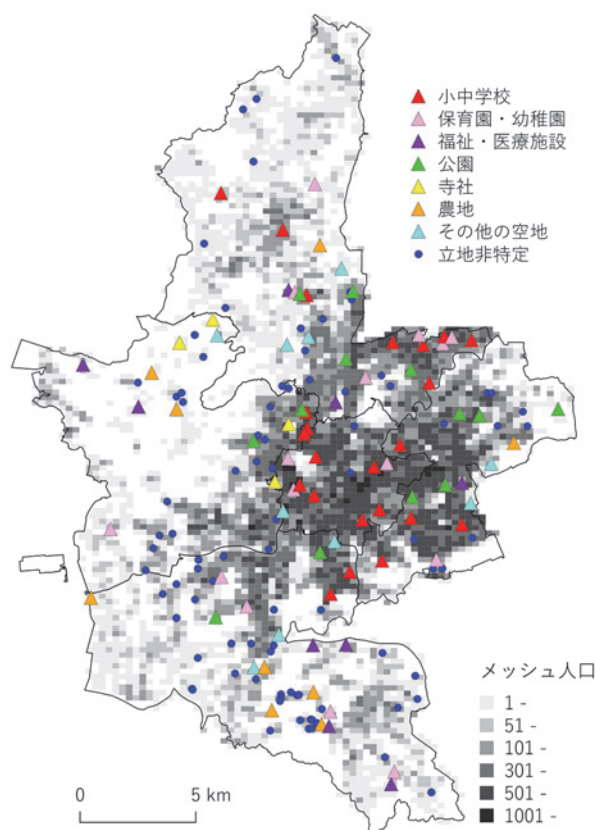


図 7 どんどやの開催場所と人口の分布

立地が地番・戸番レベルで特定されなかった箇所については、記載された範囲（大字等）における代表点を示している。人口は 2015 年、メッシュサイズは約 250m 四方。

（人口データ出典）総務省統計局「平成 27 年国勢調査に関する地域メッシュ統計」

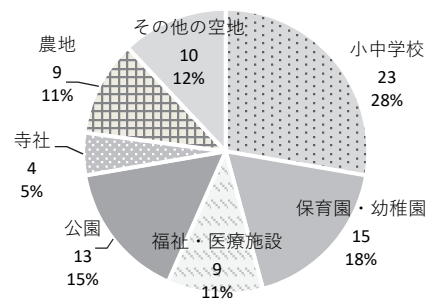


図 8 開催立地別の開催地数と割合

立地の特定できた 83 か所について集計。

次いで保育園・幼稚園が 15 か所、公園が 13 か所、福祉・医療施設と農地がそれぞれ 9 か所、寺社が 4 か所である。その他の空地 (10 か所) には、河川敷や公民館・老人憩の家などに隣接する広場などが含まれる。

それらの分布の仕方 (図 7) をみると、中央区とその周辺の人口の多い地域では、小中学校が多く分布していた。そして、それと混在するかやや外側に公園が分布し、さらにその外側に数は少ないものの、農地という傾向がみられる。保育園・幼稚園や福祉・医療施設は全体的に分布していた。

3.3 小括

熊本市域における 2020 年のどんどやは、175 か所の開催の届出があり、そのほとんどが土休日となっていた。約 4 分の 3 の校区で 1 か所以上のどんどやの開催があるなど、開催地は市域に広く分布していたが、中でも中央区やその周辺の人口集中地域に集中した分布がみられた。これらの立地は小中学校や公園が多かった。他方、富合校区や芳野校区などの人口の少ない地域にも開催が集中している地域があった。

4. 現在のどんどやの特徴分析

4.1 事例調査の実施概要

2020 年に市内で開催されたどんどやのうち、8 事例について特徴の比較分析を行った。表 4 に調査地名と調査日時及び方法を示す。調査は基本的にどんどやの開催当日に行い、準備や行事全体の観察と、主催者や櫓の作り手を含む関係者を対象にした聞き取りにより、行事内容や運営、櫓に関する情報を収集した。調査地のうち、フードパル熊本では準備作業日にも調査を行った⁸。植木町清水については、当日の調査は行っておらず聞き取り調査のみを後日行った。

調査地の位置を図 9 に示す。富合町木原と富合町榎津は市南部、植木町清水は北部のそれぞれ農林地が広がる地域に位置し、戸島は東部の住宅地と農林地が混在する地域にある。麻生田と楠は北東部の昭和 40 年代に開発の進んだ住宅地にある。城東は中心部に位置し周辺は商業・業務地である。フードパル熊本は平成 9 年にオープンした食品工業団地で周辺は農林地が広がる。

表 4 事例調査の実施概要

調査地名 ^{※1}	調査日時	調査方法 ^{※2}
富合町木原	1 月 13 日 (月・祝) 9:00-10:00	聞き取り及び観察
富合町榎津	1 月 13 日 (月・祝) 12:00-14:00	聞き取り及び観察
植木町清水	6 月 11 日 (木) 13:30-15:00	聞き取り
戸島	1 月 12 日 (日) 8:30-10:15 13:30-15:30	聞き取り及び観察 ^{※3}
麻生田	1 月 11 日 (土) 7:30-12:30	聞き取り及び観察
楠	1 月 18 日 (土) 8:00-12:00	聞き取り及び観察
城東	1 月 19 日 (日) 9:00-12:30	聞き取り及び観察
フードパル熊本	1 月 6 日 (月) 13:30-16:30 11 日 (土) 13:00-16:00 12 日 (日) 10:45-12:40	聞き取り及び観察

※1 調査地名は本稿で用いる呼称である。開催場所や開催単位に関する具体的な情報は表 5 に示した。

※2 その他、主催者や関係組織のホームページに掲載情報がある場合は参照した。

※3 自治会長により作成されたレポートも参照した。



図 9 現地調査地の位置

4.2 調査結果

4.2.1 行事概要

① 開催日時

表 5 に各調査地におけるどんどやの概要を示す。開催日は全て土休日であり、櫓の点火は午前中か昼過ぎに行われた。開催日は、土休日を基本として関係者の都合を考慮して決定されていた。例えば多くのどんどやでは、地域の消防団が火の管理や見回りを行っているが、毎年同時期には消防出初式⁹があるため、戸島、城東ではこれと日や時間をずらしてどんどやの日程を決めている。また、富合町木原では、例年富合校区の成人式の翌日¹⁰

にどんどやを開催している。植木町清水では子どもの部活動の日にも考慮している。

② 開催場所

どんどやは、富含町木原、富含町榎津、植木町清水、戸島の4か所では、水田や畑地で行われていた。これらは農地が比較的豊富にある地域である。一方、市街部にある麻生田、楠、城東の3か所では、どんどやを実施する十分なスペースが得られる場所は限られており、小学校の校庭で開催していた。フードパル熊本では施設内の広場で開催されていた。

農地が豊富な地域でも、開催場所を検討する際には様々な事項が考慮されていた。例えば、植木町清水で新たな場所を検討する際は、火を使うことから人家から一定程度の距離がありかつ人々が来やすい場所であること、周囲に観覧スペースが十分にあること、非常時に備えてすぐ消火出来るよう水路や川が近くにあり、消防車も入って来られる場所であることなどを条件としている。また、農地と宅地の混在している戸島では、人家に加えビニルハウスからも一定距離のある場所を条件としている。なお戸島では近年、宅地化の進行によって、数度会場が変更されている。

③ 開催単位と参加主体

調査した8か所のうち7か所のどんどやは、一定範囲の地域住民を対象としたもので、隣保班、自治会、校区のいずれかを単位として開催されていた。開催単位が大きくなるにつれ、参加人数や準備・運営に関わる組織は増える傾向があった(表5)。

隣保班を単位としていた調査地は、富含町木原と富含町榎津である。富含町木原は単一の隣保班で開催し、ほとんどの世帯から参加があり、全体で約20名だった。主に男性が櫓を準備し、女性が飲食物を準備していた。同じ町内では他にも7か所でどんどやが行われているという。富含町榎津では5つの隣保班が合同で開催し、昔からの住民と新規住民とを含む約60名が参加していた。同じ町内では他にも6か所でどんどやが行われているという。櫓の準備は自治会役員を中心とする地域住民が参加していた。

自治会を単位としていたのは、植木町清水と戸島で、参加者数はそれぞれ80名と150名と、隣保班と比較す

るとやや多かった。運営は両調査地とも自治会の役員が中心となり、子ども会や老人会、消防団等の地域の団体が協力して、飲食物の準備や櫓の準備、火の管理などを分担していた。

校区を単位としていた麻生田、楠、城東では、参加者人数はさらに多くなり200人から500人程度だった。運営は、校区自治協議会(麻生田)、青少年健全育成協議会(楠)、PTA(城東)と、校区レベルの組織が主催し、町内会や消防団など、より多数の団体が、櫓準備や飲食物の準備、火の管理などを担当していた。なお、城東では教員や児童も櫓準備に参加していた。

一般客を対象として開催されていたのは、食品工業団地であり観光施設にもなっているフードパル熊本のどんどやである。イベントの参加者数は4,800人と、飛びぬけて多い。実行委員会¹¹が主催し、櫓の組み立ては「西里とれたて市会」の現在および過去の役員が担っていた。当会は団地内の直売所「とれたて市」に農産物を出荷する西里地域の農家で構成される団体である。

④ 開催経緯

調査地のうち、昔から継続してどんどやが開催されていた所は榎津などに限られ、他は一度休止した後に復活させたり、新たに開始しているところが多かった。例えば植木町清水では、以前は9つある部落それぞれでどんどやが実施されていたが、昭和40年前後に一度衰退し¹²、現在のどんどやは2010年に旧植木町の事業を契機に自治会で復活させたものである。戸島についても、一度休止した後、自治会で復活させた。一方、昭和40年代に住宅開発が進んだ楠校区では、開発後まもなく新規居住者により校区の行事として夏祭りとどんどやが始められた。また城東では、約30年前に小学校の行事として実施されていたどんどやに、当時のPTA会長が協力したことをきっかけに、その後校区の行事となったという。一般客を対象とするフードパル熊本のどんどやは、地域との関わりを大切にするという趣旨から、施設が立地する西里地域で行われていたどんどやを採り入れて、平成9年のオープン翌年から開催されてきた。

⑤ 行事内容

多くの調査地では、開催にあたり主催者等による挨拶があり、一年の無病息災を祈る旨等が述べられた。その

後、木や竹の棒の先に布や藁を巻いた松明で点火された。点火は子どもが行うところが多く、城東では8名の子どもたちが今年の抱負を発表した後で櫓を囲んで点火した。一方、富合町榎津では隣保班の班長が点火した。また、富合町木原地区では毎年、年男が点火すると決まっているという。点火後は竹が焼け折れたりするため、常に材料を中心に寄せるなどの作業が行われた。参加者は火を眺めつつ飲食や会話を楽しみ、やがて熾火ができると各自が持参した餅や芋などを焼き始めた。櫓の消火については、農地で行っている富合町木原、富合町榎津、戸島では基本的に自然鎮火させ、翌日以降に燃えカスなどを取り除く作業が行われる。その他の会場では放水により消火される。小学校でのどんどやでは餅焼きを始めた後、一時間程するとプールの水が放水されて片付けが始まった。混入した金属片などは取り除かれ、灰や燃えかすは構内に掘った穴に埋められた。

全ての調査地で飲食物の持ち寄りや提供が伴っていた。富合町木原ではお神酒とつまみや菓子が振る舞われ、富合町榎津では隣保班毎に飲食物を持ち寄った。自治会や校区によるどんどやでは、子ども会などが調理を担当して、ぜんざいや獅子鍋といった料理が参加者全体あるいは準備参加者等に振る舞われた。一般客を対象にしたフードパル熊本のどんどやでは、鍋やぜんざい、カレーなど多彩な料理が屋台で提供された。

また、その他の内容として、楠では子どもを対象にして紙飛行機、竹馬、羽子板などの伝承遊びのコーナーが設けられた。植木町清水でも、紙鉄砲や竹細工などの昔遊びが実施され、加えて子どもへのプレゼントも準備された。フードパル熊本では、ステージイベントが催され、太鼓演奏や神楽などが披露された。

4.2.2 櫓

① 櫓の作り手

櫓の組み立ては、自分たちで行っていたところが多く、楠¹³のみ造園業者が主な作業を担っていた。開催規模の小さな富合町木原では参加男性が皆で作業していたが、それ以外では自治会役員や決まった団体に分担され、それに有志が加わるなどして櫓の組み立て作業が行われた。いずれの地域も、作業は基本的には大人が行っていたが、城東では児童も一部参加していた。

櫓の準備にあたっては、多くの地域で、農業、造園業、

建設業等に従事している住民が、技術的な指導を行ったり、チェーンソー等の機材、重機、トラックなどを提供していた。例えば、城東では建設業の元 PTA 会長が、木竹材の取扱いなどの知識や技術を生かして、長年、櫓準備を指導している。麻生田では、校区内の古くからある集落を含む自治会が、例年竹の伐採を担当しトラックなども提供している。特に中心となって材料提供や櫓の組み立てを指導しているのは農業従事者である。戸島では櫓づくりに重機が必要不可欠になっているといい、農家が操縦している。食品工業団地であるフードパル熊本でも、農家から構成される「とれたて市会」が櫓づくりを担当している。

② 材料の調達

材料にはモウソウチク、メダケ、藁、剪定枝、雑木などが用いられていた。また正月飾りも櫓にくべられた。

調査地は市街部から農村部まで様々な環境下にあるが、櫓の主材料であるモウソウチクについては、会場から概ね数百m以内の距離にある竹林から入手するところが多かった。一方、城東校区ではやや遠方の西里地区の竹林からモウソウチクを入手していた。これらはいずれも地域住民やその知人の所有している竹林である。多くの場合、運搬にはトラックが使われた。竹林の周辺道路の交通量が多いと搬出作業が困難になるため、城東、麻生田では過去に採取地を変更したことがあったという。なお芯木については、富合町木原と富合町榎津では初子の生まれた家が提供するという風習があるという。ただ今年は両地域ともそれが無かったため、富合町木原では芯木が無い櫓が立てられ、富合町榎津では当日伐り出したものを使用したという。

剪定枝は家庭で発生したもののほか、小学校でのどんどやでは構内で発生した剪定枝も用いられた。藁については、近年の稲作農家の減少や、収穫時のコンバイン機による細断により、入手が難しくなりつつある状況だった。富合町榎津では会場である水田で発生する藁を利用していたが、その他は近隣あるいは遠方の農家から手配していた。麻生田では、これまで藁を提供してきた前述の農家が稲作をやめるために、来年以降の入手については検討が必要となっていた。

表 5 各調査地におけるどんどやの概要

調査地名	富合町木原	富合町榎津	植木町清水	戸島	麻生田	楠	城東	フードパル熊本
周辺環境	農村部 水田。南側には雁回山。	農村部 水田。北側に浜戸川。一部は近年開発された住宅地。	農村部 水田、畑地、斜面林。	混住部 畑地と住宅地が混在。南側に戸島山。	市街部 新地団地など、昭和40年代に開発の進んだ住宅地。	市街部 楠住宅団地等、昭和40年代に開発の進んだ住宅地。	市街部 中心市街地（業務ビル、ホテル、住宅）、熊本城。	農村部 水田、畑地、斜面林。
開催日	1月13日(月・祝)	1月13日(月・祝)	1月12日(日)	1月12日(日)	1月11日(土)	1月18日(土)9:40	1月19日(日)	1月12日(日)
点火時刻	9:20	12:00	10:00	13:30	10:00		10:00	11:00
開催場所(所在地)	畑地 (南区富合町木原)	水田 (南区富合町榎津)	水田 (北区植木町清水)	畑地 (東区戸島6丁目)	麻生田小学校校庭 (北区麻生田3丁目)	楠小学校校庭 (北区楠5丁目)	城東小学校校庭 (中央区千葉城町)	「フードパル熊本」内広場 (北区和泉町)
開催対象	地域住民							一般客
開催単位	隣保班 (単数) 富合校区2町内 (木原区)馬場下組		自治会 (複数合同) 山本校区5町内 (清水乙区)		校区 託麻東校区4町内 麻生田校区※1		校区 楠校区 城東校区	
参加人数	約20人	約60人	約80人	約150人	約500人	約200人	約200人	約4,800人
主な参加組織(*…主催)	隣保班	隣保班	町内自治会*、実年会、老人会、子ども会、消防団、体育委員	町内自治会*、農区、消防団、老人会、子ども会	校区自治協議会*、まちづくり委員会*、地域コミュニティセンター、町内自治会、食生活改善推進委員会、消防団、防犯委員会、交通安全協会、児童・民生委員	青少年健全育成協議会*、町内自治会、防犯委員会、交通安全委員会、子ども会、PTA、消防団、大楠クラブ、体育協会、まちづくり委員会ふれあい部会	PTA*、校区自治協議会、消防団、小学校(教員・児童)	西里・フードパル熊本「どんどや」実行委員会*、校区自治協議会、自治会連合会、まちづくり委員会、西里とれたて市会、消防団
櫓の燃焼以外の行事内容	軽食振舞い	軽食持寄り	ぜんざい振舞い、昔遊び、プレゼント	獅子汁等振舞い	ぜんざい振舞い	ぜんざい振舞い、伝承遊び	ぜんざい振舞い、点火セレモニー	神事、ステージイベント(太鼓演奏、神楽等)、屋台販売、抽選会
主な櫓作り手	参加者男性	自治会役員等	実年会	自治会役員、農区、消防団等	1町内自治会等	造園業者等	PTA、教員、児童、消防団等	西里とれたて市会
建機の使用				ホイールローダー、トラクター		高所作業車、ユニック車		ユニック車・高所作業用ゴンドラ
主な材料と調達先	モウソウチク	雁回山	町内の竹林	町内の竹林	近隣の竹林	業者持ち込み	西里地区	敷地隣の竹林、近隣農家の竹林※2、近隣神社
	メダケ	近隣の浜戸川堤防	近隣の道路土手				西里地区	近隣の道路土手
	藁	近隣農家	会場の水田	城南の農家	校区内の農家		嘉島町の農家	
	剪定枝	地域住民	地域住民	地域住民	不明	業者持ち込み、小学校構内	小学校構内	敷地内バラ園
	その他		雑木…近隣竹林に混生しているもの				雑木…西里地区の竹林に混生しているもの	農業残渣(オクラ)…近隣農家

観察及び聞き取り調査に基づいて作成。

※1 3町内については別途どんどやが開催されており含まない。

※2 「西里とれたて市会」のメンバー農家が所有する竹林。竹はあらかじめ伐採し枯らしておいたものを使用。

図10 完成した櫓
(城東)図11 芯木に藁を括り付ける様子
(戸島)図12 櫓の骨組みに取り付けた
棚の上に藁を置く様子(麻生田)

③ 櫓の構造

櫓は円錐状で、最も大きなフードパル熊本や城東の櫓で高さが約 18mあり、小さなものは 7-8m 程度¹⁴であった。櫓の基本的な構造は調査地間で類似しており、モウソウチクの芯木とそれに立てかけた支えによって円錐状の骨組みを組み立て、内部に剪定枝や藁、雑木などを詰めた上で、周りにモウソウチクや束にしたメダケを立てかけ、全体を数本の縄で巻いて固定する、といったものである（図 10）。藁や枯草などの燃えやすいものは着火剤として外側にも置かれ、各自が持参する正月飾りも外側に置かれる。

組み立て方には、調査地毎に少しずつ違いがあった。例えば、骨組みを作る際に、芯木を立ててから支えを一本ずつ立てかけていく方法や、上部を縛った芯木と支えの束をまとめて立てた後で、支えを広げる方法などである。楠校区では先に剪定枝を積み上げ、その上にモウソウチクの束をクレーンで一気に吊り上げて、傘の様に広げて固定するというユニークな方法がとられていた¹⁵。組み立て作業は手作業が多いが、楠やフードパル熊本ではクレーンや高所作業用装備のある車両、戸島ではホイールローダーやトラクターが導入された。

櫓の燃え方としては、上までしっかりと火が上り、バランスよく燃えること、一定の時間は勢いよく燃え続けることなどが良いとされている。そのために、芯木などに藁を括り付けて火がきちんと上まで届くようにする（榎津、戸島、城東；図 11）、棚などの構造を追加して内部の藁や剪定枝などの詰め物をバランスよく配置する（麻生田、楠、城東、フードパル熊本；図 12）、中に詰めたり外に覆いかぶせるモウソウチクやメダケは事前に伐採して乾燥させておく（フードパル熊本、植木町清水）などの工夫がされていた。

4.3 小括

調査を行ったどんどこやは、いずれも土休日に開催され、行事の運営や櫓の準備は、大人中心で行われていた。いずれも、モウソウチクなどでつくった櫓に正月飾りや書初めをくべて燃やし、熾火で各自が餅焼きを楽しむといった要素が含まれており、ぜんざいなどの飲食の提供もあった。また、昔遊び等のプログラムが含まれている調査地もあった。

どんどこやは、1 か所を除いて地域の行事として行われ

ていたが、その範囲は隣保班、自治会、校区と規模が異なっていた。小規模などんどやは農村部であり、校区単位の大きなものは市街部で行われるという傾向があった。そして、範囲が広くなるにつれ、参加人数や運営に関わる団体が増え、組織的な運営がなされていた。一般客を対象としたフードパル熊本のどんどこやは、大きな櫓、各種イベント、屋台料理など、集客のための様々な仕掛けがあった。

櫓の構造は基本的に類似し、竹で骨組みを作って中に藁や剪定枝等が詰められていたが、調査地によって材料や組み立て方、良く燃えるための工夫などに細かな違いもみられた。櫓の準備には、農業、造園業、建設業等に従事している住民が、技術的指導や、資材等の提供において重要な役割を果たしていることが多かった。材料の入手は、竹など近隣から得られるものもある一方、遠方からの手配が必要なものもあった。

5 総合考察

5.1 どんどこやの変容

5.1.1 変容の共通する特徴

消防署への届出データの集計から、熊本市域では 2020 年に 175 か所でどんどこや開催の届出があったことが分かった。事例調査を行ったどんどこやは、昭和 40 年代以前と同様に、竹などで櫓を組み立て、参加者が持参したお飾りや書初めをくべて燃やし、残り火で餅を焼くといったものだった。

しかし、かつてとは異なる点も多く確認された。伝統的に小正月の火祭り行事としてのどんどこやは、毎年決まった日（1 月 14 日）に行われていた。しかし現在は、市域のほとんどのどんどこやは固定された日ではなく、1 月中旬の土休日に開催され、現地調査事例では具体的な日付は毎年参加者の都合を考慮して決定されていた。開催日の変更は、産業構造の変化により会社勤めなどの人が増加する中、多くの人が参加可能にするためであったと考えられる。加えて、小中学校の校庭で行う場合はそもそも学校が休みの日に行う必要がある。

また、かつてのどんどこやは、子どもが主体的に参加することが特徴的な行事であったが、現在は全体の運営、櫓の準備とも大人が担っていた。ほとんどの調査地で、子どもの参加は大人の監督の元で点火を行うなどに限られていた。少子化や娯楽機会の多様化など、高度経済成

長期以降の社会の変化に伴い多くの年中行事が衰退し、特に子どもが関わってきた諸行事はほとんど消滅しているといわれている（長沢，2014）。現在のどんどやは大人たちの手によって復活し維持されているといえる。

以上のような現代のどんど焼きの性質の変容は他地域でも多くみられており、神事性や伝統が失われているという指摘の理由になっている（石井，2020；笠井，2019）。

櫓の材料や組み立てにおいても変化がみられる。昭和40年代以前の櫓は、竹や藁を主体とするものが多かったが、今回の調査では、ほとんどの調査地で家庭や学校から出た剪定枝も櫓の詰め物の主材料の一つとして用いられていた。これに関しては聞き取り調査の中で、昔に比べて藁や雑木などの入手がしにくくなっていること、野焼きの禁止により各家庭での剪定枝の処分が難しくなっていることを指摘する声が聞かれた。また材料は、昔は子どもが集落の各家をまわって集めるなど身近なところから入手していたが、今回の調査では近隣では手に入らず、遠方からの手配が必要なケースもあった。組み立て作業は人力だけでなく、クレーンやホイールローダー、トラクターなどの重機を使用する調査地もあった。大型の櫓の組み立て、作業人数の減少、大型・大量の剪定枝などの材料の変化に対応したものと考えられる。

5.1.2 どんどやの多様化

上記以外に昭和40年代以前のどんどやとの違いを特徴づける要素は、開催の規模である。2章の文献調査や4章の植木町清水や戸島での聞き取りから、従来多くのどんどやは、部落単位など小規模で実施されていたと考えられる。しかし、現地調査でみたどんどやにはこれより規模の大きいものが多く見られた。

富合町木原や富合町榎津のどんどやは単一や複数の隣保班という規模で実施され、昭和40年代以前のどんどやの規模と同等かそれと近いものと考えられる。行事の内容も、櫓を燃やすことを主体としたシンプルなものであり、初子の生まれた家が芯木を提供したり、年男が櫓に点火するなどの風習も残されていた。

これらに対し、市域ではやや規模の大きな自治会単位のものや、さらに大規模な校区単位のどんどやも行われている。植木町清水と戸島では、両者とも部落単位のどんどやが一度衰退・休止し、その後地域を広げて自治会により復活されたものであった。復活した際に、ぜんざ

いや獅子鍋などの調理・配布や昔遊びなどの新たな要素が加わったり、子ども会や老人会などの地域団体が運営に参加するようになったものと推測される。どんど焼きにこうした新たな要素が追加される現象は、多摩市におけるどんど焼き（松尾，2003）などでも報告されている。

校区単位のどんどやになると、櫓のように新規住民により新たに開始されたり、城東のように元は学校行事であったものであり、かつて部落毎に行われていたようなどんどやとは直接的なつながりを持たない可能性が高い。高度経済成長期以降、多摩市や仙台市の郊外の住宅開発地で、住民の交流やふるさと意識の醸成を目的として新たなどんど焼きが開始されたことは、冒頭で見た通りである（松尾，2003；安藤，2006）。校区のどんどやでも、自治会同様に新たな要素が含まれており、運営にはさらに多様な地域団体が参加するなど、組織的に行われる地域イベントとしての性格がさらに強くなっている。

3章では、人口の少ない農村部において、どんどやの開催が集中している、すなわち小規模などんどやが開催されていると考えられる地域があること、他方市街部では小中学校での開催が多いことが明らかになった。4章の事例調査結果とあわせて考えると、農村部の古くからのコミュニティが維持されているような地域では、比較的かつてに近い形態で小規模などんどやが維持されている一方で、市街部の新規住民の多い地域では、校区組織などが代替して現代の状況にあわせた形でどんどやが開催されていると考えられる。

なお、フードパル熊本のどんどやは、地域住民のみならず広く一般客を対象にしている点で、他のどんどやと性質が異なる。立地する西里地域の文化を観光施設のイベントに採り入れつつ、より多くの集客を得るためのステージイベントや屋台料理などの要素が追加された観光イベントとなっていた。

5.2 どんどや開催の今日的意義

5.2.1 地域のつながり形成や誇りの醸成

地域住民を対象としたどんどやは、地域コミュニティの在り方が変容している現在、普段はあまり顔をあわせることのない住民が集まる機会の一つとなっている。こうした声は、小規模な隣保班単位のどんどやでも、大規模な校区単位のどんどやでも聞かれた。様々な地域団体や、子どもからお年寄りまで異なる世代の住民が参加す

るどんどやは、互いを知る貴重な機会となる。調査地では、火を囲みながら新規居住者が古くからの住民から地域の昔の様子について話を聞いたり、子どもが大人に餅を入れる場所やタイミングなどを教わったりしながら、コミュニケーションがはかられている様子も観察された。

また、皆で一つのもので作り上げていくという作業に意義があるという声も聞かれた。竹の伐採や櫓の組み立て作業、またそれを燃やすという非日常的な経験を共にすることで、住民間のつながりがより深まる可能性がある。さらに、大きい櫓を作ったり、上まで勢よく燃やすための工夫を凝らすなど、櫓づくりにはこだわりも見られ、こうした目標を共有することで地域の一体感や誇りが醸成される可能性もある。

ただし、現在はほとんどの調査地で作業が分担化されており、櫓づくりを担う人、とりわけ中心的役割を担う人は固定化している所も多かった。地域のつながり形成や誇りの醸成には、より多くの主体が関わりを持つことが必要だと考えられる。

5.2.2 自然とかかわる機会の創出

どんどやの櫓に用いられる材料は、かつての農業を中心とした生活では身近なものであったが、現在の都市型のライフスタイルでは、特に関心が無ければ、竹林や水田に入る機会はほとんどない。しかし、櫓の準備にあたっては、多くの調査地で近隣の竹林から竹を伐採しており、富合町榎津ではどんどや用の藁を準備するために会場となる水田で稲の刈取りが行われていた。こうした作業はリフレッシュの機会となるとともに、普段は見過ごしがちな地域の自然に気づき、さらに言えば竹林の管理放棄や拡大といった地域課題を知るきっかけにもなるかもしれない。自然との関わりが希薄になりがちな現代において、地域行事という形で、また櫓をつくり燃やすという楽しみの中で、多くの人がまずは地域の自然と接することのできる機会は貴重であるように思われる。

しかし、現地調査ではこうした作業に関わる人もまた多くの場合限定的であり、特に中心となっているのは、農業や造園業などのもともと自然と接する職業であったり、長年継続して携わってきた人など、一部の人やグループに集中している傾向がみられた。自然との関わりの場の創出という効果を発揮するためには、普段は自然との接点の少ない人も含めた、より多くの人々が櫓の準備

に参加することが必要となる。そしてこのことは、どんどや行事そのものの維持にとっても必要なことである。大きな櫓を安全に見栄え良く燃やすためには、一定程度の技術や経験が必要である。こうした自然素材や火の扱いも都市における生活では縁のないものとなりつつある。どんどや行事の継続のためには、子どもも含め様々な人が、櫓準備を担いつつ必要な技術や知識を受け継いでいける工夫が必要がある。

6. 結言：研究の成果と今後の課題

本稿では、熊本市域におけるどんどやを対象に、まず昭和40年代以前のどんどやの特徴を整理した。そして、現在の全市的な開催状況を把握し、具体的な特徴の比較分析を行った。どんどやは現在も市内で広範囲にみられるが、小正月の開催や子どもの主体的参加という、かつてのどんどやの基本的特徴は、全体的に失われていた。また、開催規模や運営の仕方、行事内容などの点において多様化していた。現在のどんどやは、小規模な地域単位で行う比較的かつてのどんどやに近い内容のものから、従来はなかったプログラムを追加したり組織的に運営するなど地域イベントとしての性格の強いもの、ステージイベントや屋台料理を伴う観光施設における集客イベントなど、多様なものが存在している。本稿では、このような現代のどんどやについて、コミュニティ形成における役割が期待され、都市型のライフスタイルを送る住民にとっての自然とかかわる機会となる可能性についても指摘した。

他方、本稿では現在行われているどんどやの継続に係る課題については扱っていない。一部のどんどやでは、人口減少や担い手不足により櫓をつくる人員が不足するのではないかといった懸念が聞かれた。また、櫓の材料のうち藁は入手困難となりつつあり、モウソウチクの伐出や運搬上の苦勞も聞かれた。都市部では灰や燃えカスが周辺の住宅に飛散することもあり、地域住民への配慮も必要とされている。今後はこうした課題に関する調査研究も必要である。

謝辞

本研究を行うにあたり、聞き取り調査に快く対応して下さった主催者及び関係者の皆様に深く感謝申し上げます。また、中央区、富合、清水、龍田、植木の各コミュニテ

イセンターにも協力いただいた。消防局には届出データの提供をいただいた。熊本博物館学芸員の福西大輔氏には研究開始にあたり助言をいただいた。これらの方々に心より感謝申し上げる。

(参考文献・資料)

- (1) 天野武監修 (2000) 『都道府県別日本の民俗分布地図集成 13 九州地方の民俗地図 2』. 東洋書林.
- (2) 安藤直子 (2006) どんと祭の現在から見えるもの. 仙台市教育委員会編『大崎八幡宮の松焚祭と裸祭り調査報告書 (仙台市文化財調査報告書第 305 集)』仙台市, 90-101.
- (3) 石井研士 (2020) 『日本人の一年と一生』春秋社.
- (4) 植木町史 編纂委員会編 (1981) 『植木町史』植木町.
- (5) 大平和弘・中堀卓・浦出俊和・上甫木昭春 (2014) 市街化に伴う自治会分割地域における居住者の祭りへの関わり方とコミュニティ意識. ランドスケープ研究 77 (5), 701-706.
- (6) 笠井賢紀 (2019) 『栗東市の左義長からみる地域社会』サンライズ出版.
- (7) 川尻町編 (1980) 『肥後川尻町史』(復刻版) 青潮社.
- (8) 河内町史編纂委員会編 (1987) 『河内町史 柑橘・民俗編』河内町.
- (9) 木田恵理奈・後藤春彦・佐藤宏亮 (2011) 商店街振興組合による祭礼運営を通じた地域コミュニティ形成に関する研究. 都市計画論文集 46 (3), 481-486.
- (10) 熊本市編 (1973) 『熊本市史復刻版』青潮社.
- (11) 熊本市教育委員会編 (1983) 『熊本市内の年中行事調査報告 (熊本市民俗調査報告書第 2 集)』熊本市教育委員会.
- (12) 熊本市民俗調査委員会 (1981) 『熊本市内祭り・郷土芸能調査報告』熊本市民俗調査委員会.
- (13) 小西恵美 (2014) 伝統行事を通じた地域コミュニティの形成—諏訪御柱祭の一事例—. 社会関係資本研究論集第 5 号 113-127.
- (14) 小山正 (1961) 『天明村史』
- (15) 齊藤純 (2012) どんど焼き. 田中宣一・宮田登編『三省堂年中行事事典』三省堂, 137-139.
- (16) 新熊本市史編纂委員会編 (1996) 『新熊本市史別編第二卷民俗・文化財』熊本市.
- (17) 高橋嘉代 (2010) 二極化する都市祭礼—宮城県仙台市の「どんと祭」の実施件数および参拝者数の注目して—. 論集 37, 212-193 (43-61).
- (18) 田中宣 (2012) 小正月. 田中宣一・宮田登編『三省堂年中行事事典』三省堂, 104-106.
- (19) 谷口貢 (2017) 年中行事研究の歩み. 谷口貢・板橋春夫編『年中行事の民俗学』八千代出版, 29-48.
- (20) 塚佳織・山本信次 (2010) 祭礼行事のソーシャル・キャピタルへの影響—岩手県陸前高田市気仙町けんか七夕を事例に—. 農村計画学会誌 28, 231-236.
- (21) 富合村誌編さん委員会編 (1971) 『村誌富合の里』富合村.
- (22) 長沢利明 (2014) 年中行事の変化. 民俗学事典編集委員会編『民俗学事典』丸善出版, 422-423.
- (23) 北部町町史編纂委員会編 (1979) 『北部町史』北部町.
- (24) 松尾あずさ (2003) 多摩ニュータウンのドンドヤキ. 民俗学論叢 18, 35-501.

¹ 九州一帯では、どんど焼きに類似した「鬼火」と呼ばれる火祭り行事もあり、1月6日や7日に行われている(齊藤, 2012)が、本稿ではどんどやのみを対象とした。熊本県教育委員会(1977)による『熊本県の民俗地図』(天野(2000)に所収)における「どんどや・鬼火」の分布図をみると、球磨地方や天草地方では鬼火のみの地域が多い一方で、熊本市の位置する県北部ではどんどやが実施されている地域が多いことが分かる。(両方を行っている地域も点々と存在する。)2章で資料とした文献では、どんどやについての記載が多く、鬼火を実施していたところは少数であった。

² 表1に示した通り、平成8年発行の「新熊本市史別編第二卷民俗・文化財編」では民俗に関する部分について、記述の基準を概ね戦前(昭和前期)におくとしている(p.192)。昭和50年代以降に発行された河内町史、植木町史、北部町史も、昭和40年代後半までに編纂が開始され、史料収集や現地調査等が行われている。また、昭和58年発行の「年中行事調査報告書」の聞き取り対象は年長者であり、調査により「数十年前の熊本市のおかれていた環境などが浮かび上がってくるものと考えた」という記述がある(p.1)。以上を総合して、参照した文献の記述は、昭和40年代以前の状況に関するものと判断した。

³ なお、唐人町については、地域で共同のどんどやが行われていたのではなく、各家の裏庭で荷造りの藁や飾り物が燃やされた。

⁴ 報告書には「ドングリノキ」と記載。

⁵ 熊本市火災予防条例第45条により、「火災と紛らわしい煙又

は火災を発するおそれのある行為をしようとする者は、あらかじめ、その旨を所轄消防署長に届け出なければならない。」と定められており、どんどやを開催する際にも、開催日時、開催場所、届出事由等を届け出る必要がある。本稿で分析対象としたのは、2020年1月10日及び16日時点での届出データ（1月10日以降の実施分）のうち、届出事由がどんどやとなっていたものである。なお、届け出がされても、雨天等の理由により実際には開催されなかったケースもあるが、具体的な開催地やその数は不明である。そのため本稿では全てを分析対象とした。

⁶ 住所の記載が大字や丁目までとなっていたり、住宅などのどんどやを行うスペースが無いものが特定された場合については、正確な場所が特定できないため立地の種類は特定してない。

⁷ 立地が特定できなかった箇所は 92 か所あり農村部が多かった。うち 61 か所は住所が町名や大字名等までの記載となっており、31 か所は、空中写真から住宅等の建物が建っておりどんどやを実施するスペースがないことが確認された。後者については、開催立地が農地や空き地等の際に、届出者の住所や近隣の建物住所が記載されたことなどが理由として考えられる。

⁸ フードパル熊本の櫓は、数日にわたって組み立て作業が行われた。他の観察調査地では、櫓は当日に組み立てられた。

⁹ 2020年の熊本市消防出初式は、1月12日（日）10時より開催。

¹⁰ 2020年は1月12日（日）に開催。

¹¹ 正式には「西里・フードパル熊本『どんどや』実行委員会」といい、会長は㈱フードパル熊本の代表取締役が務め、フードパル熊本内の企業の代表者と㈱フードパル熊本の担当者が構成。

¹² この頃、どんどやを含め様々な行事が無くなったという。当該地域ではスイカ栽培が盛んで年末年始は苗づくりで繁忙期にあたることから、どんどや衰退の一因になったと考えられていた。

¹³ どんどや開始当初は、自分たちで竹の伐採や櫓の組み立ても行っていたが、その後知り合いの農家に依頼するようになり、4-5年前から造園業者に依頼するようになったという。

¹⁴ 筆者の歩測や目測による凡その値。

¹⁵ 組み立て作業を行った造園業者によると、芯木や支えの竹は本来ならば穴を掘って固定するが、学校の校庭でそれができないため、このような方法をとっているという。